

新聞投書欄に見る「道徳」の変遷

木村和美（大阪大学）

1. 問題意識

2013 年 11 月 11 日に行われた小中学校の道徳教育見直しを検討している文部科学省（以下、文科省）の有識者会議「道徳教育の充実に関する懇談会」において、正式教科ではない道徳を教科に格上げする報告案がまとめられた。道徳の教科化について文科省は、通常の教科とは異なる枠組みをもつ「特別の教科」（仮称）として位置づける方針を示した。「教科」とは「法制上定義がなされている訳ではないが、一般的に、①免許（中・高等学校においては、当該教科の免許）を有した専門の教師が、②教科書を用いて指導し、③数値等による評価を行う」（文部科学省 2008）ものと考えられている。今回の「特別の教科」化案は①専門の教員免許は設けず「道徳教育推進リーダー教師」を配置し、②将来的には検定教科書を導入するが、当面は文科省作成の「心のノート」改訂版を主として使用し、③記述式の評価を行う、としている。

今回の道徳の「特別の教科」化案は、2000 年の小渕・森内閣が設置した教育改革国民会議の「小学校に『道徳』、中学校に『人間科』、高校に『人生科』などの教科を設け」という提言や 2007 年の第一次安倍内閣が設置した教育再生会議の「徳育を従来の教科とは異なる新たな教科として位置づける」という提言の流れをくむものだと考えられる。これらの提言は結果として見送られることになったが、2007 年の「徳育の教科化」についてはマスコミも注目し大きな

話題となった。

以上のように、日本における道徳教育は大きな変化をむかえている。その背景には社会の変化、人々の意識の変化が関係していると言える。特に、いじめ、少年犯罪等が社会問題として認識されてからは、子どもたちに対する道徳教育の重要性がより問われるようになった。そこで、本報告では新聞の投書欄をもとに、今日の日本社会においてどのような「道徳」に関心が示されてきたのかを明らかにしていく。

2. 分析対象

新聞投書には、さまざまな年代が考える「道徳」が表わされていると考えられる。新聞という媒体の特徴から投稿者の多くが大人であると推察されるが、道徳教育が大人から子どもに対してなされるものだとすれば、大人が関心をよせる「道徳」を明らかにすることには意義があると考えられる。

投書欄の先行研究としては、宮武（2003）が 1955 年から 1969 年までの『朝日新聞』の投書欄「声」を分析し、受験の特徴を明らかにしたものや、元森（2005）が 1983 年から 2002 年までの『毎日中学生新聞』の読者投稿欄を分析し「子ども」のイメージとその揺らぎを明らかにしたものなどがあり、新聞の投書欄は社会の特徴とその変化を考察するうえで適した資料であると考えられる。

そこで、本報告では 1984 年から 2013 年までの『朝日新聞』の投書欄「声」にお

いて掲載された投書を分析する。『朝日新聞』の記事データベースを利用し、分類「書評」、キーワード「道徳」で検索を行った。重複するものや、テーマ討論を省き、内容を整理した結果、567本の投書を分析の対象とすることにした。

3. 結果と考察

投稿者の基本データとしては、「年齢」は最年少が10歳、最高齢が94歳であった。最も人数が多かったのが60代の120人(21.4%)、次いで70代の86人(15.3%)だった。最も少なかったのは90代の2人であり、平均年齢は50.3歳であった。主な「職業」としては無職135人(23.7%)、教育関係者98人(17.2%)、学生(小学生～院生)89人(15.6%)、主婦81人(14.2%)、会社員・会社顧問49人(8.6%)が挙げられる。教育関係者には小学校から大学までの教員、非常勤講師、塾講師、元教員等を含んでいる。「性別」は明記されていないため名前から判断した結果、大まかな傾向としては男性が約6割、女性が約3割であった。

投稿者については40代から70代が60.5%を占めているが、幅広い層から投書がなされていると言えるだろう。10代が10%、学生が15.6%いることから、若者から「道徳」に対して関心と意見が寄せられていることが分かった。また、教育関係者からの投書が多いことから、「教育」、特に「学校教育」と「道徳」の強い結びつきを教育関係者自身が自覚していると言えるだろう。

掲載された投書数が多かったのは、2000年の58本、2007年の45本、2013年の44本であった。特に2000年から2007年にかけては、毎年20本以上が掲載されており「道徳」への関心が高い時期であったと言える。2000年、2007年、2013年は、道徳

教育が政策上重大な局面を迎える時期であるため、単なる「教育」ではなく、「政治」と「教育」の両方に対する強い関心の現れであると言える。

投書の分類については、朝日新聞の記事データベースの「面名」を参考にしながら行った。その結果、「教育」180本、「社会」175本、「政治」116本となり、この3分野が約8割を占めていた。「教育」では道徳について(道徳の時間、いじめ、道徳の教科化等)、「社会」ではマナーやモラル、思いやりについて、「政治」では不祥事や教育についての「内容」が多く見られた。この「分野」と「内容」についてはさらに分析を行っていく。

当日は、より詳細な分析データをもとに、社会の変化、教育政策の変化と関連付けながら、人々が関心を寄せる「道徳」について考察を行う。

詳細な分析結果、考察については当日配付資料を参照のこと。

【参考文献】

- 宮武実知子、2003『『受験地獄』の黙示録—朝日新聞『声』欄に見る教育『十五年戦争』佐藤卓己編『戦後世論のメディア社会学』柏書房、pp.193-219.
- 文部科学省中央教育審議会、2008「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について(答申)」
- 元森絵里子、2005「現代社会における『子ども』のゆらぎ—中学生新聞投書欄から分析する子どもから見た『子ども』」教育社会学会『教育社会学研究』第76集、pp.149-168.